

先日（6月23～24日）、朔東地域に時ならぬ降雪である。調べてみると観測史上最も遅い雪であった。サウナでの地元の古老と思しき人達の話でも非常に珍しいとのことだ。確かに、これ以前の記録は、網走：6月8日（昭和16年、1941）、釧路：5月21日（大正元年、1912）、根室：6月8日（昭和16年、1941）、十勝：5月26日（昭和16年、1941）であり、一月近くも記録を塗り替えたことになる。げに、自然は恐ろしき哉。

十勝地方や斜網地区の年間日照時間が、全国有数の多さであることは、既に述べたとおりである（朔東から第2号参照）が、年間霧日数を調査してみると、全国で100日を超えているのは、根釧地域以外には、本州の内陸部のみである（最もこれらの地域は山霧であるが・・・）。釧路の年間霧日数は113日、根室では111日であり、因みに、帯広は56日、広尾66日、網走26日となっている。

霧とは、空気中に浮遊する微小水滴（直径数 μm ～数十 μm ）で、視程が1km以下になる状況と言う。微小水滴は、光を散乱、吸収するので、霧の中では見通しが悪くなり、時には数m先が見えなくなることもある。

夏の海霧は、高温・多湿の空気が、冷たい海面に触れて、下層から冷やされて発生する。海霧が多いのは、一般的には寒流と暖流が接している海域で、日本付近では、千島列島から北海道太平洋岸、三陸沖にかけての海域である。この海域には、太平洋高気圧から吹き出す、高温・多湿な南よりの風が流れ込んで海霧が出来る。オホーツク海の流水が融けた冷たい水の影響で、親潮の勢力の強い5月から8月にかけての夏季に、特によく発生する。

海霧の発生する時間帯は、夕方から朝方である。従って、日中には青空が見えることもある。そういう関係からか、旭川の日照時間（1623h）に比較すれば、釧路の日照時間は1944hと比較的高い。

先日、航空自衛隊襟裳分屯基地で訓練視察をする機会があり、ヘリで出かけた。十勝の海岸に何時もなら見える筈の海面が見えず、真っ白い雲が一面、びっしりである。見た目には、綿雨が海岸付近に置かれている様なそんな感じだ。パイロットに聞けば海霧であるという。初見参である。海霧に突入することは危険であるのか、ヘリコプターはその縁を縫うが如くに飛んでいく。白い塊が、海岸から内陸に向かい近づきつつあるようだ。特に、海岸近くの山と山の谷間にはかなり濃い霧が流れ込んでいる。

海霧は、道東の夏の風物詩である。旅行者として、異邦人として眺め・楽しむ分には、海霧は素晴らしい風物詩ではあり、旅情を誘う。句材として、歌謡曲の題材として、画題として海霧は取り上げられることが多く、ロマンを感じる人も多いのは事実であろう。

然しながら、この地に住む者にとっては、ロマンだ、風物詩だとばかりは言っておられない。海霧による日照不足は農業に対する影響が大である。因みに十勝と釧路支庁の農業粗生産額を比

較してみよう。釧路支庁は十勝の2300億の4分の1の農業生産額に過ぎない。土壌も畑作向きではないけれども。上空から見たときこんなに広い大平原なのに何故畑地が無いのだろうと訝ったものだが、このような事情があったのである。

また、この時期は昆布漁の時期でもあり、昆布干しに支障があるのではなかろうか。細部は不明であるので、機会を得て話を聞いてみたい。

霧は光を吸収するので、各種交通の障害ともなる。飛行場では、吸湿剤を散布したり、石油を燃やしたり、ドライアイスやヨウ化銀を撒いて霧粒を雨滴にする等の方法で人工消霧が試まれた。また、防風林ならぬ防霧林なるものを造成して流れ込んでくる霧粒を捕捉して霧を薄めようとの方法も採られている。

洗濯物が乾かないというのが主婦の悩みである。乾燥機は必需品との声も聞こえる。暖かい日差しで乾燥された洗濯物と、乾燥機では着心地が違うけれども致し方ない。

また、海霧が市街地に流れ込んでくると、日中でも暗くなるそうだ。車両は、前照灯をつけ、ノロノロ運転をせざるを得ない。

(参考：5師団司令部2部資料、百科事典、HP、聞き取り etc)